

# 保育所保育の職業適応に関する研究

## (第二報)

須 見 喜 六

### I 研究の目的

理想の保育者が備えるべき資質は何か。これを明確にすることは保育者養成教育の目標を得るために大切であるが、理想の保育者が備えるべき資質を決定する方法には、保育の本質という理念の上から演繹的に分析決定する方法と、保育の実際から出発する帰納的な方法と二つの立場がある。

この研究は後者の立場をとり、現に保育所の職場において適応度の高い保母群の資質を分析することによって、帰納的に理想的保母が備えるべき具体的人格特性をつかもうとするのが主目的である。

従来行われた理想の保育者像の帰納的な研究においては、職場で適応度の高い保育者群として、専ら外的客観的側面の適応の基準のみによって評価されたものが分析の対象として選ばれたきらいがあったが、この研究では外的客観的側面の適応度と共に、内的主観的側面の適応度をも重視し、両側面共に適応度の高いものを対象として選び、その性格構造を分析する方法をとる。第一報と第二報の関係は次の通りである。

1. 第一報は被験者57名をもって主観的側面の適応度を測る基準を作成したが、第二報では20名を増加して計77名にして先の基準を改訂する。
2. 第一報は適応良好群6名と非良好群5名しか被験者が得られなかったが、第二報では適応良好群10名と非良好群9名に増加して、先の結果に再検討を加える。
3. 第一報ではYG性格検査のみを用いたが、第二報では内田クレペリン精神検査を加味する。
4. 第一報では保専卒業者のみであったが、第二報では短大卒業者をも含めて最適事例と最不適事例の保母が所有している特性を、保育所長の観察にもとづいて質問紙法により調査する。
5. 第一報の後に短大卒業者が職場に出たので、先の保専卒業者と適応度得点の比較を行う。

### II 研究の方法

#### 1. 質問紙法による職業適応度の調査

##### (1) 主観的側面の適応度の調査

調査票の様式は第一報のときと同様。

被験者は表の1の通り。

表の1 被験者数

学歴別	区別	郵送数	回答数	回答率(%)
保育専門学園卒業		101	57	56.4
短期大学卒業		31	20	64.5
計		132	77	58.3

時期は昭和44年12月10日（就職後8ヶ月経過）

(2) 客観的側面の適応度の調査

岡山県立短期大学卒業者の外的客観的側面からの適応度の評価（上位は25%以内とする）とその卒業者を含めて現職場で最も適応度の高いと見られる事例と、反対に最も適応度の低い事例の保母一名づつを（氏名を伏せて）挙げてもらい、その保母が所有している特性を親展文書により保育所長に尋ねて回答してもらう。

対象は岡山県下および広島県下において岡山県立短期大学保育科卒業者を保母として採用している保育所の所長25名（ただし回答を得た数はそのうちの20名）

時期は昭和45年1月10日

2. 性格検査

(1) 矢田部ギルフォード（YG）性格検査

在学中（昭和42年11月10日）に検査を行っていたので、その検査結果を用いる。(1)

(2) 内田クレペリン精神検査

在学中（昭和42年11月17日）に検査を行っていたので、その結果を用いる。(12)

3. 結果の処理方法

(1) 主観的側面の職業適応診断基準の作成

第一報の57名に今回の20名を加えて計77名について、第一報同様の手続きにより集計し、領域別および総得点のパーセントイル順位を  $PR = \frac{100}{N_h} \{fp(X-L) + Fh\}$  により換算する。

(2) 主観的側面適応上位群と下位群の性格特性の比較

適応度総得点において上位より25%、下位より25%のものを選んで、それぞれ上位群、下位群とし、両群のYG性格検査の特性別平均得点と標準偏差を算出する。

また両群の平均得点により性格プロフィールを描いて比較する。

(3) 適応良好群と非良好群の性格特性の比較

主観的側面適応上位群のうち客観的側面適応（保育所長の観察による評価）も良好なるものを適応良好群とし、主観的側面適応下位群のうち客観的側面適応の良好ならざるものを非良好群として、両群のYG性格検査の特性別平均得点と標準偏差を算出して比較する。

次に両群の平均得点により性格プロフィールを描いて比較する。また両群の性格類型を比較する。

(4) 客観的側面適応良好群と非良好群との作業曲線の比較

保育所長の観察による適応良好群と非良好群の内田クレペリン精神検査による平均作業量を算出し、それにより両群の作業曲線を描いて比較する。また両群の曲線型の分布を比較する。

(5) 客観的側面の最適事例と最不適事例の保母が所有する特性の比較

保育所長の観察により、その職場で最も適応していると見られた事例の保母が持っている特性を質問紙の回答により集計する。最不適事例についても同様に集計して両群の特性を比較する。

(6) 保育専門学園卒業者と短期大学卒業者との適応得点の比較  
岡山県立保育専門学園の卒業者と岡山県立短期大学卒業者の項目別、領域別、および総得点の平均と標準偏差を比較する。

(7) 職業的不適応の事例的研究

主観的側面および客観的側面の適応度調査の結果において適応度の低い保母について事例的に研究する。

### Ⅲ 結果および考察

#### 1. 主観的側面の職業適応診断基準の改訂

第一報の57名に今回の20名を加え計77名の保母を被験者として調査した結果から領域別および総得点のパーセンタイルを出す表の2および表の3の通りである。

表の2 領域別パーセンタイル表

領域 \ 得点	-6以下	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5	+6	+7	+8	+9	+10以上
性能合致度					1	5	5	10	15	30	55	75	85	90	95	99	99
人間関係	1	1	1	1	1	5	15	30	40	60	75	85	90	95	99		
待遇				1	10	30	55	70	85	99	99						
職務満足感			1	1	5	10	15	25	40	55	70	80	99				

表の3 総得点のパーセンタイル表

総得点	-4以下	-3	+1	+2	+3	+4	+5	+7	+8	+9	+10	+11	+12	+13	+14	+15	+16	+19	+24
		-2	-1				+6										+18	+23	以上
パーセンタイル	1	5	10	15	20	25	30	35	40	50	55	60	65	70	80	85	90	95	99

この尺度を使用することによって性能合致度、人間関係、待遇、および職務満足感の何れの領域において如何なる程度の適応をしつつあるかおよび全体としてどの程度に適応しつつあるかについて主観的側面の適応度を診断することができる。項目別の平均得点と標準偏差は後に掲げる表の12を参照すればよい。

藤原喜悦らは因子分析によって職場適応の因子を勤労意欲因子と職業適性因子に分けているが、この尺度でいう性能合致度の領域が職業適性因子に、人間関係、待遇、職務満足感の領域が概ね勤労意欲因子に相当する。(14)

#### 2. 主観的側面適応上位群と下位群の性格特性の比較

主観的側面の適応度の総得点の高い方から25%と総得点の低い方から25%の事例を抽出して夫々上位群および下位群とし、両群のYG性格検査の結果による特性別平均得点と標準偏差を示すと表の4の通りである。

表の4 主観的側面適応上位群と下位群のYG性格検査結果

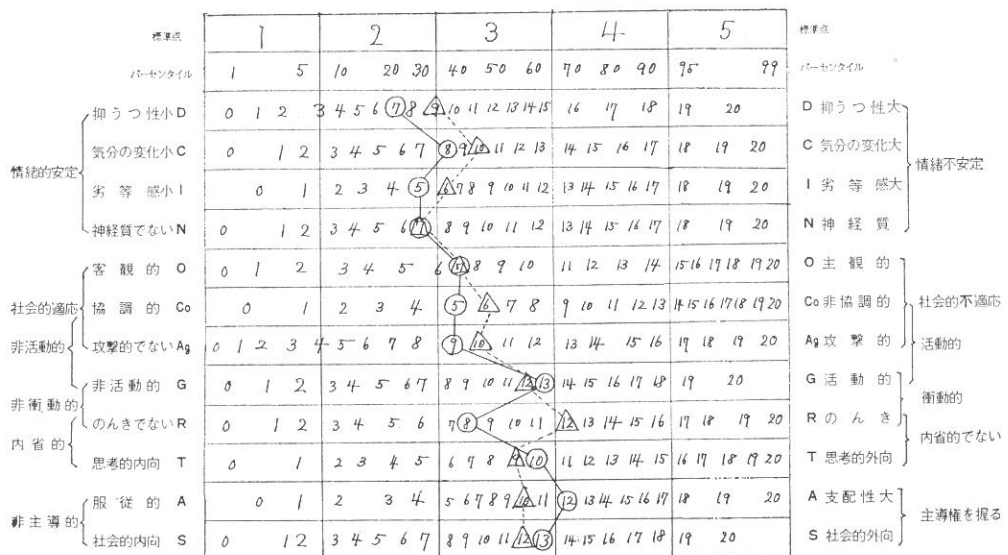
群別 特性別	上位群		下位群	
	M	SD	M	SD
D	7.07	4.55	9.93	6.03
C	8.00	4.00	10.06	3.97
I	5.71	3.49	6.80	3.95
N	7.28	4.09	7.80	4.85
O	7.35	4.09	7.80	2.92
Co	5.07	2.99	6.86	2.84
Ag	9.07	3.63	10.80	3.05
G	13.21	3.68	12.20	3.65
R	8.57	5.15	12.06	3.47
T	10.00	3.79	9.93	3.80
A	12.71	4.83	10.93	4.72
S	13.42	4.14	12.40	4.70

(註) 特性Rにおいてのみt検定有意差あり(P<0.05)

YG性格検査を受けていたものは上位群のうち14名、下位群のうち15名である。  
特性別に検定を行ったところ有意の差の見られたのはR (rathymia) のみであった。  
(P<0.05)

両群の平均得点によって性格プロフィールを描くと図の1の通りである。

図の1 主観的側面適応上位群と下位群のYG性格検査プロフィール



(註) ○—主観的側面適応上位群(14名)  
△—主観的側面適応下位群(15名)

標準点において差の見られるのは I(inferiority feelings)とR(rathymia)とA(ascndace)であり、上位群の方が一標準点だけ劣等感は小の方へ、のんきさは中庸の方へ、そして支配性は大の方へひらきが見られる。

### 3. 適応良好群と非良好群の性格特性の比較

主観的側面の適応上位であって客観的側面の適応良好なるものを適応良好群とし、主観的側面下位なるもののうち客観的側面良好ならざるものを適応非良好群として、両群のYG性格検査の結果による特性別平均得点と標準偏差を示すと表の5の通りである。

表の5 適応良好群と適応非良好群のYG性格検査結果

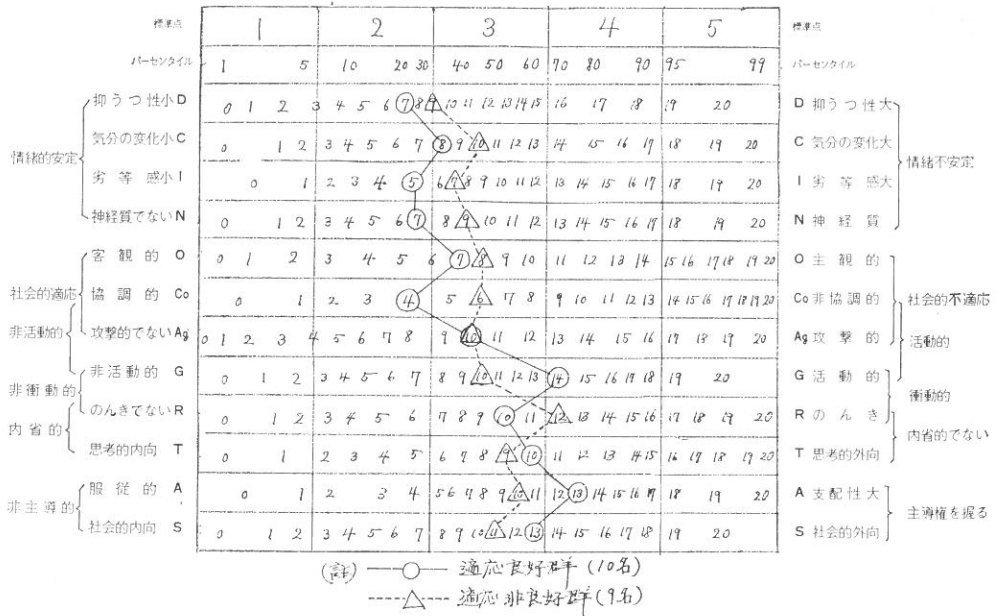
特性別	適応良好群		適応非良好群	
	M	SD	M	SD
D	7.00	4.60	9.88	6.06
C	8.20	4.42	10.11	4.30
I	5.30	3.00	7.33	3.39
N	7.10	4.48	9.55	4.49
O	7.10	4.70	8.44	2.71
Co	4.90	2.84	6.11	3.20
Ag	10.30	3.16	10.88	3.34
G	14.20	2.85	10.00	2.94
R	10.90	5.35	12.33	3.12
T	10.00	3.74	9.55	4.00
A	13.90	4.25	10.00	5.69
S	13.80	4.42	11.00	5.75

(註) Gにおいてのみ t 検定による有意差あり(P<0.01)

t検定による有意の差の見られるのは特性 G(general activity) のみである。(P<0.01)

両群の特性別平均得点によって性格プロフィールを描くと図の2の通りである。

図の2 適応良好群と適応非良好群のYG性格検査プロフィール



標準点において一段階の差の見られるのは I(inferioityfeelings) と N (nervousness) と Co (lack of cooperativeness)と G(general acivity)と R(rathymia)と A(ascendace) の特性であり、適応良好群よりも一段だけ劣等感小、神経質でない、協調的、活動的、のんきさ中庸、支配性大の方へひらきが見られる。両群の性格類型の分布を比較すると表の6の通りである。

表の6 適応良好群と適応非良好群の性格類型比較

群別 性格 類型別	適応良好群	適応非良好群	計
A	1	1	2
A'		1	1
A''		1	1
AB	1	2	3
AC	1	1	2
AD	1		1
AE	1		1
C	1		1
D	2		2
D'	2	2	4
E'		1	1
計	10	9	19

(註) X<sup>2</sup>検定有意差なし

両群に有意の差はなく、何れかの群に偏って一つの型が多いということではなく、両群ともに多様の型が見られる。

客観的側面と主観的側面の適応の関係は表の7の通りである。

表の7 主観的側面と客観的側面の適応の関係

		客観的側面		
		良 好 群	非良好群	計
主観的側面	上 位 群	11	3	14
	下 位 群	10	9	19
	計	21	12	33

(註)  $X^2$ 検定有意差なし

両群に有意の差はなく、客観的側面の適応は良好に見えても主観的側面は下位のものが30.3%もあり、逆に主観的側面の適応は上位であって客観的側面の良好ならざるものが9.0%ある。

#### 4. 客観的側面の適応良好群と非良好群の作業曲線の比較

客観的側面の適応良好群と非良好群の内田クレペリン精神検査の結果による平均作業量は表の8の通りである。

表の8 客観的側面適応良好群と非良好群の平均作業量

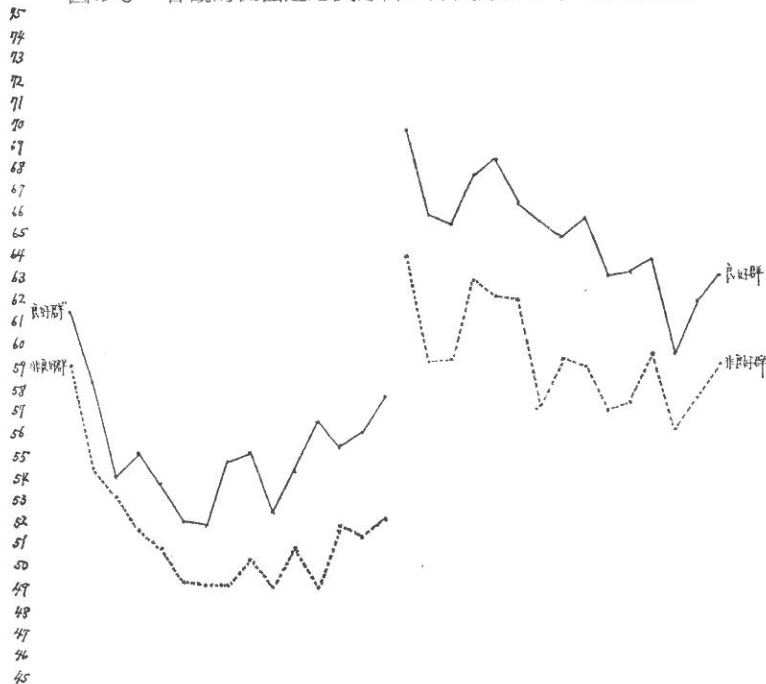
		群別	
		良 好 群	非良好群
前 段	行別		
	1	61.4	59.0
	2	58.3	54.4
	3	54.0	53.2
	4	55.1	51.6
	5	53.7	50.8
	6	52.0	49.3
	7	51.8	49.1
	8	54.7	49.1
	9	55.1	50.3
	10	52.6	49.1
	11	54.4	50.8
	12	56.5	49.0
	13	55.4	51.9
	14	56.0	51.3
15	57.6	52.1	

後 段	1	69.6	64.0
	2	65.8	59.2
	3	65.5	59.4
	4	67.6	62.9
	5	68.3	62.2
	6	66.3	62.0
	7	65.5	57.2
	8	64.9	59.3
	9	65.5	59.0
	10	63.1	57.0
	11	63.3	57.4
	12	63.8	59.7
	13	59.7	56.1
	14	62.0	57.6
	15	63.1	59.1

(註) 良好群は10名 非良好群は11名

その平均作業曲線は図の3の通りである。

図の3 客観的側面適応良好群と非良好群の平均作業曲線



平均作業曲線の型においては良好群の方がやや定型に近いが、大きな差は見られず、作業量



において非良好群の方がやや劣り、後段においてその差が大きい。

両群の作業曲線の分布は表の9の通りである。

表の9 客観的側面適応良好群と非良好群の作業曲線型分布

群別	曲線型別	定 型	準 定 型	準々定型	疑 問 型	異 常 型	計
良 好 群			$a' 1$	$a'f 4$	$f(A)5$		10
非 良 好 群				$a'f 7$	$f(A)3$ $f(B)1$		11
計			1	11	9		21

両群に有意の差は見られない。なお内田クレペリン精神検査は短期大学卒業者に対してのみ行ったので被験者が少なく、客観主観両側面適応良好群と非良好群の比較は略した。

#### 5. 客観的側面の最適事例と最不適事例の所有特性の比較

保育所長の観察により、その職場で最も適応の高い保母と、その反対に最も不適応な保母の事例について、その保母が所有している特性を調査した結果は夫々表の10と表の11の通りである。

表の10

観察による最適事例保母の所有特性

所 有 特 性	頻 数	%
1. 明 朗 性	9	45
2. 協 調 性	8	40
3. 子 供 へ の 理 解	6	30
4. 積 極 性	6	30
5. 幼 児 へ の 愛 情	5	25
6. 職 務 へ の 忠 実 さ	4	20
7. 綿 密 さ	3	15
8. 健 康	3	15
9. 性 格 円 満	2	10
10. 骨 惜 し み を し な い	2	10
11. 責 任 感	2	10
12. 表 明 的	2	10
13. その他(共通せず)	17	85

(註) 回答数20名。1名が二つ以上の特性を回答しているものもある。

表の11

観察による最不適事例保母の所有特性

所 有 特 性	頻 数	%
1. 子 供 へ の 態 度 不 良	8	40
2. 協 調 性 な し	7	35
3. 明 朗 性 な し	6	30
4. 熱 意 不 足	6	30
5. 不 健 康	4	20
6. 教 養 を 鼻 に か け る	2	10
7. 組 合 運 動 を す る	2	10
8. その他(共通せず)	13	65

(註) 回答者20名。1名が二つ以上の特性を回答しているものもある。

適応事例においても不適応事例においても子供への理解と態度と共に明朗性、協調性の有無ということが一位から三位までの項目としてあげられている。次には積極性の有無と健康の良否ということである。

#### 6. 保育専門学園卒業者と短期大学卒業者の適応得点の比較

岡山県立保育専門学園が昇格して岡山県立短期大学の保育科となったのであるが、今回はじ

めて保育科の卒業者が職場に出たので、保専卒業者と適応得点を比較してみると表の12の通りである。

表の12 学歴別平均得点の比較

領域別	学歴別	保 専 卒		短 大 卒	
		M	SD	M	SD
1		+1.14	0.71	+1.05	0.86
2		+0.25	0.54	+0.10	0.53
3		+0.86	0.76	+0.80	0.87
4		+0.59	0.68	+0.45	0.80
5		+1.02	0.59	+1.25	0.62
性能合致		+3.86	2.16	+3.65	2.57
6		+0.95	0.79	+0.90	0.53
7		+0.16	0.58	+0.25	0.43
8		+0.57	1.00	+1.05	0.80
9		+0.27	0.57	+0.25	0.53
10		+0.48	0.88	+0.40	0.20
人間関係		+2.43	2.62	+2.85	1.85
11		-0.14	0.95	-0.25	1.04
12		+0.07	0.93	+0.10	0.70
待遇		-0.07	1.59	-0.15	1.52
13		+0.93	0.81	+0.90	0.70
14		+0.09	0.97	+0.30	0.78
15		+0.27	0.91	+0.10	0.88
16		+1.41	0.72	+1.50	0.67
職務満足		+2.70	2.48	+2.20	2.01
総得点		+8.92	6.68	+8.55	6.01

(註) t検定有意差なし

項目別、領域別ならびに総得点においてt検定による有意の差はない。この比較においては短大卒業者は就職後一年未満であり、保専卒業者は一年以上経過者が大部分であることをも考慮に入れなければならない。

両群に共通して見られる傾向としては、保育所保育の仕事をや甲斐のあるものと感じているが、待遇条件において不満足である点である。

#### 7. 職場適応の良好ならざる保育の事例的研究

主観的側面適応下位のもの、客観的側面適応良好ならざる保育の事例的研究を行ったところ、同僚関係において主観的側面では得点が特に低くはないが、客観的側面では最下位に評価

されている事例があった。その理由は自らの学歴（保専卒）を鼻にかけて、検定で保母資格をとった同僚を見下す態度があるというのであった。短大出身保母のうち、退職したいという例はなかったが、転職したいという保母が三例あった。その理由は幼稚園の方が労働条件がよいので幼稚園へ変りたいものが一名、他の一名は保育時間について保護者との間に気まずいことがあったからというもの、残りの一名は優秀な先輩保母のいる職場へ変りたいというもののであった。今回の調査で目立ったことの一つは、県下の特定地区において組合活動がさかんになり、先輩保母の中には批判されているものがあり、新卒の保母が保育所長と組合との間にあってとまどっている事例があったことである。

#### 〔要 約〕

この研究は現在保育所において職場適応度の高い保母群の資質を分析することによって、帰納的に理想的保母が備えるべき具体的人格特性をつかむことを主目的として行われた。

先ず、被験者を先の57名から77名に増加して、主観的側面の適応度を診断する基準を改訂した。この77名の中から、主観的客観的両側面の適応良好群10名と非良好群9名を抽出して、し両群のYG性格特性を比較したところ、G (general activity) の特性において有意の差が見られた。主観的側面の適応上位群14名と下位群15名の間にはR (rathymia) の特性においてのみ有意の差が見られた。次に客観的側面の適応良好群10名と非良好群11名の内田クレペリン精神検査による作業曲線を比較したところ、曲線型においては大きな差は見られず、作業量において非良好群の方が若干低いことがわかった。20名の保育所長の観察による最適事例の保母と最不適事例の保母の所有特性を質問紙により調査し両群を比較したところ、子供への態度の良否と共に明朗性と協調性の有無が共通して特性の主位に挙げられた。

保育専門学園卒業者57名と短期大学卒業者20名の主観的側面の適応度平均得点を比較したところ、両群に有意の差は見られず、共通点として見られたのは、保育所保母を働き甲斐のある職務として高く評価している反面、待遇条件等においては低く評価していることであった。

以上の結果において適応良好群と非良好群の質的な差が予想に反して少なかったのは、比較的適応良好なもののみが職場に残っていて、適応の良好でないものは職場に少なかったことによるものと考えられ、比較群として適応良好ならざる例を多く集めることは容易でないことを知った。

短期大学卒業者がはじめて職場に出た時点において今回の調査を行ったために、内田クレペリン精神検査等の被験者数が少数にとどまったが、今後継続研究して被験者数を多くしたい。

#### 〔附 記〕

この研究を進めるに当って保育所長はじめ職員各位から資料の収集についてご協力をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

#### 参 考 文 献

1. 北村晴朗 1955 適応の心理 誠信書房 27~78
2. 近藤貞次 1964 職業心理学 雇用問題研究会 182~215
3. 名古屋市立保育短期大学 1964 研究紀要第2巻 1~29
4. 長島貞夫, 山崎正, 藤原喜悦 1958 適応性診断テスト解説 金子書房 1~2
5. 永丘智朗 1961 産業心理学 朝倉書店 37~41

6. 日本保育学会 1968 保育学年報 フレーベル館 286～305
7. 西本修, 友松諦道 1959 幼児教育者論 国土社 9～93
8. D. E. Super 日本職業指導学会誌 1964 職業生活の心理学 誠信書房 182～215
9. D.E.Super and I.O.Crites, 1965 Appraising Vocational Fitness, Harper 39
10. 中央幼児教育研究会 1966 幼児教育心理学 学芸図書 190～193
11. 辻岡美延 1960 YG性格検査実施手引 竹井機器工業 4～10
12. 内田勇三郎 1951 内田クレペリン精神検査手引 日本精神技術研究所 1～23
13. 依田新, 藤原喜悦 1966 青年と社会 大日本図書 150～165
14. 依田新 1968 現代青年の人格形成 金子書房 275～291

昭和45年3月30日出稿